膝蓋骨不安定症患者における手術治療前後のスポーツ活動

○津田 英一（つだ えいいち）(MD)[1)]，三浦 和知（MD)[1)]，山本 祐司（MD)[2)]，
奈良岡 琢哉（MD)[2)]，木村 由佳（MD)[2)]，藤田 有紀（MD)[2)]，石橋 恭之（MD)[2)]

[1)] 弘前大学大学院医学研究科　リハビリテーション医学講座
[2)] 弘前大学大学院医学研究科　整形外科学講座

大腿四頭筋，膝蓋骨，膝蓋腱および周囲骨・軟部組織からなる膝伸展機構は，スポーツによる急性外傷，オーバーユース障害の好発部位である．このことは取りも直さず，膝伸展機構の機能がスポーツパフォーマンスの優劣に大きく関与することを意味している．代表的な膝蓋大腿関節疾患の一つである膝蓋骨不安定症，反復性膝蓋骨脱臼はスポーツ活動が盛んになる成長期に好発することが知られている．小・中学生を対象とした直接検診では，小学５年生の時点で既に膝蓋骨トラッキングの異常を示すものが見られ，スポーツ活動やスポーツ習慣に少なからず影響を与えるものと推察される．

今回当科では，反復性膝蓋骨脱臼の診断で手術治療を受けた症例を対象としてスポーツ活動に関するアンケート調査を行った．それによると発症前に競技レベルでスポーツを行なっていたものは約 2/3 であり，残りの 1/3 はそれ以下のスポーツ活動レベルにとどまっていた．また前者のうち，術後調査時に競技スポーツに復帰し継続していたものは 17％に過ぎず，全くスポーツ活動を行なっていないものは 30％に達した．同時に調査した KOOS のサブスケールスコアでも，ADL の 98.1±2.5 点に対して Sport/Rec では 86.9±14.3 点と低値を示し，スポーツ復帰の観点からは十分な治療効果が得られていないことがうかがえた．